

不登校傾向児童生徒へのITによる効果的支援

長野市立北部中学校 教諭 湯本秀二

東日本電信電話株式会社 樋口順子

キーワード：適応指導教室、適応指導員、不登校傾向児童生徒、支援体制、ITの関わり

1. テーマのねらい

本研究は、平成15年度Eスクエア・アドバンスで実施した研究であるが、ICTの各種ツールの特性を生かし、直接的コミュニケーション及び複合的且つ補完的なシステムの利用により、適応指導教室（不登校気味の児童生徒が通う中間的な教室：学校に近隣する）に通室する児童生徒だけでなく、日々対応している適応指導員やメンタルフレンド（大学生）やボランティア等の活動支援に対するICTの有効性について、実践を通して検証を行った。

2. 利用するアプリケーション

商用ASPサービス「Webで宿題」を利用する。不登校傾向児童生徒のコミュニケーションツールとしての使い方を中心に活用方法を探る。このツールを補完の意味からも長野市立の各小中学校が利用している各種ツールも、併せて適応指導教室に提供する。

①「Webで宿題」の機能

・担任通信欄（WEBメール）、会議室（掲示板）、Webで宿題（eラーニング）、学級新聞、予定表

②その他のツール ・学習ポータルサイト（動画教材、eラーニング教材等）、テレビ会議システム

3. 研究内容

3.1 T. P. O.

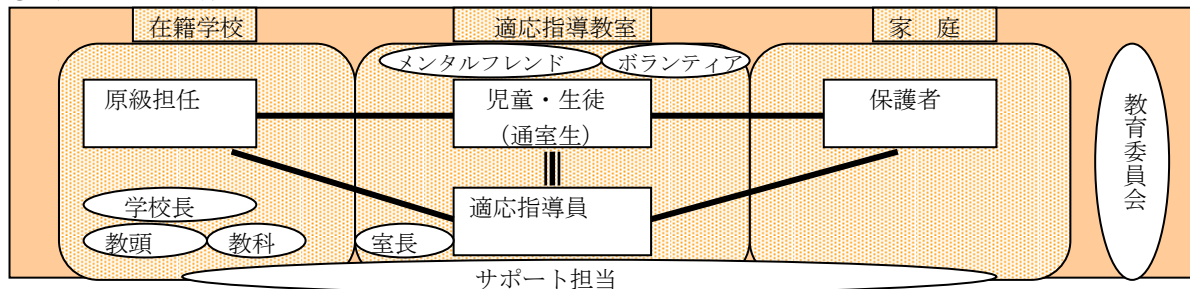
① 主たる対象者 通室する不登校傾向児童・生徒、適応指導員

② 主たる実践場所 適応指導教室（5カ所）

③ 主な関わり

「Webで宿題」は多くの機能を持つが、本研究においてはコミュニケーションツールとしての面を中心に適応指導員と不登校傾向児童生徒との関わり方を中心にし、仮説を組み検証したいと考えた。

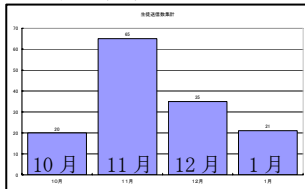
④ 関わりの全体像



3.2 システムの利用状況 (H15.10月～H16.1月)

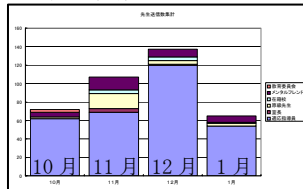
<担任通信欄> (生徒発信)

利用総数141回



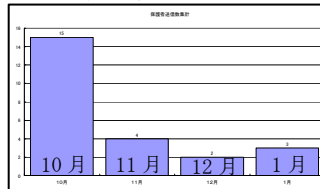
(先生発信)

利用総数701回



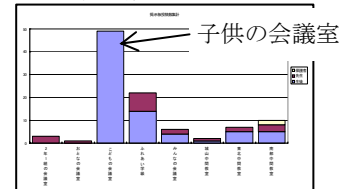
(保護者発信)

利用数24回



<会議室> (会議室別)

利用数100回



4. 実践例

本研究は、適応指導教室の通室生（通室児童・生徒）が研究の中心的存在であった。コミュニケーションを重視したICTの活用を実践研究の中心に据え、その中から教科学習の利用へと拡大していった。本研究では、システム面からのサポートに加え、運用面において、通室生のプライバシーへの配慮が重要であった。そして、システム運用面のサポートと教育現場で人間的ケアを行う適応指導員の存在がキーとなった。

通室生と適応指導員との人間関係が構築された環境での活動の広がりが実践された事例、またその人間関係の構築過程において、本システムの介在により関係の構築及び促進ができた事例が報告された。さらに、これまでコミュニケーションができなかった通室生間の輪、ボランティアとの輪と、通室生の活動に広がりや深まりを持つことができるようになった。

4.1 A 教室の事例

① 背景

適応指導員 1 名に対して児童生徒数が多く、個人への対応が大変な状況にあった。また、14 年度からインターネットは接続されていたが、コミュニケーションツールとしての I C T 環境はなく、本システム（「Web で宿題」）の導入により実現された。

② 適応指導員の願い

通室生に多くの人々との関わりを持たせ、その関わりの中から通室生自ら意欲を持ち、自立する力すなわち「生きる力」を育てたいと願っている。

③ 通室生と適応指導員の関わりの中で

「Web で宿題」の会議室へ他の適応指導教室の生徒から書き込みがされたことがきっかけとなり、卓球交流が企画されるに至った。当初は会議室で交流の打合せを行っていたが、詳細な打合せをする必要性が生じてきた。

そこで、適応指導員のメールアドレスを利用して指導員の指導のもと、中学生を中心に主体的に交流に向けた打ち合わせが始まり、適応指導員は、その活動を暖かく見守り続けることとなった。卓球の練習を通じて、同じ適応指導教室内の仲間を意識し活動しようとする意欲となり、通室内で生徒同士が他生徒を受け止められる「輪」が生まれた。卓球を接点とした交流活動は、他の適応指導教室との対抗意識や他室生に対して同じ境遇としての仲間意識を持たせ、人間関係を構築する活動へつながり、人間関係造りのすべを学ぶ一助となったと考える。

そして、この活動を通じて、通室生から「教室のホームページを作りたい」という積極的な発言を引き出すことができた。適応指導教室にできた開放的な雰囲気と人間関係構築の芽生えを背景に、通室生同士が「あなたは自分のことをどう思いますか？」「E さん（友達）をどう思いますか？」と自己に問いかけるインタビューをすることができるようになった。また、適応指導員の影ながらの指導により、自然発生的にインタビュー係、ホームページを作成する係、まとめる係等、役割分担が決まり完成することができた。

その後、子どもたちの活動は心の波と同様に浮き沈みはあったが、意欲は継続されていた。卒業アルバムを作りたいとの発案があり、文集を作成することとなった。この活動を通じて Y 生に変化が現れてきた。Y 生は当初対人恐ろしい態度があり、パソコンは苦手という意識から自らは絶対にパソコンにふれようとしなかった。しかし、適応指導教室が企画したパソコン講習会に参加するようになり、適応指導員やサポーターからの「うまくなったね。」などの声にうれしそうに反応した。さらにキーボード入力に興味を示し、「もっと練習したい。」と言い出すようになった。Y 生にとって卒業の節目にあたり、これらの活動を通じて、自らできるようになるようとする意欲の芽生えとともに、文集を完成させたことで、今後の彼の活動の支えとなると適応指導員は期待している。

4.2 その他の事例

① 原級担任（通室生が本来所属する学級の担任）とのコミュニケーション

通室生には原級に対する帰属意識が残っており、原級担任のメールアドレスから来た同級生のメッセージをきっかけに、原級へ復帰することができた生徒が一部出てきた。またその原級復帰の動きの影響で、同じ適応指導教室内の通室児童・生徒に、「原級との関わりを持ちたい。」との好影響を及ぼすようになった。

② 教科学習への利用

本研究においては、通室児童・生徒からの必要感に基づき、e ラーニングを実施してきた。その間合いについても、適応指導員の判断を重視した。ある通室児は、適応指導教室で宿題を出してもらったことに加え適応指導員からのメッセージを貰ったことを喜んでいて、また、ある通室生は、適応指導教室へ来ない日の宿題を適応指導員に出してくれるように求めた。これらの子供の必要感に応じて e ラーニングを実施してきている。この活動を通じて適応指導室の他の子供たちにも好影響を与えるきっかけとなった。

5. まとめ

5-1 利用面

- ① 適応指導教室の児童生徒は、適応指導員との人間的信頼関係が重要な要素となる。適応指導教室の I C T の利用は、コミュニケーションを重視し人間関係の回復を前提とした利用が求められる。
- ② 教科の指導においても、自ら進んで学習する意欲を持たせる教材も必要であるが、通室生個人に対応した教材や学習方法を適応指導員が提供することにより、学習に意欲を持つきっかけ作りができる。
- ③ 通室生の I C T の積極的利用及び指導においては、適応指導員の情報教育スキル（技術面・教育面）によるところが大きく、システム運用等に併せた活用のサポートや学習面での支援が必要である。

5-2 システム面

- ① A S P 機能をベースにトラブルや利便性、手軽さに配慮した本システムの提供により、情報発信及びコミュニケーションツールとして、I C T の活用は、有効であった。
- ② 適応指導教室においては、メールの既読状況の把握を始め、適応指導員を中心とした関係作りと通室生個々の活動に配慮した仕組みが利用にあたり重要であった。
- ③ ②の反対にメールは、児童生徒から適応指導員を介在しないメールを望む声も多く聞こえ、学習利用のメール及びコミュニケーションツールとしてのメール利用について、情報モラルの観点を加え運用の工夫が必要である。